

# 英語学習のつまずきを特定するアンケートの工夫

## 英語学習アンケートから見えてくる英語学習のつまずき (2)

藤本 幸伸・小川 弘敏\*<sup>1</sup>

English Learning Difficulties identified through the questionnaires for high school students (2)

FUJIMOTO Yukinobu, OGAWA Hirotohi \*<sup>1</sup>

(Received September 30, 2025)

キーワード：英語学習のつまずき、学習アンケート、音読、グラフィック・オーガナイザー

### はじめに

前回、ベネッセと GMO が高校生と社会人に行った英語学習調査の結果から英語学習意識を分析し、中高生と社会人は英語が話せたらカッコいいというイメージを強く持っていること、英語の苦手意識と英語学習時間の短さや日常生活で英語を使う機会の少なさが大きく関係していること、英語を話したい気持ちを持ちながら自分から英語を聞いたり発音することは少ないという齟齬を指摘した。だが、ベネッセと GMO の英語学習調査は、英語は好きだが成績が伸びず苦手意識を持っている学習者層に注目するものではなかった。

この英語学習調査結果の分析と、小川が山口県立萩高等学校で行った生徒の学習実態（単語を調べない、英語チャンクの理解不足、準備した英文を丸覚えする reproduction や retelling 活動、授業中の翻訳アプリ利用など）の観察を基に、萩高等学校探究科 1 年生を対象とした英語学習アンケートの項目を工夫し、高校生の英語学習のつまずきを特定することを試みた。アンケート結果から、英語音声に関して生徒は同化・脱落・連結といった英語音声の変化に困難を感じていることや 600～900 語の長さの英文を読むことの難しさや一文一文はわかっても英文全体の趣旨や論旨構成の理解に自信が持てないなどを明らかにできた。この結果を基に、授業のなかで生徒に音読を促す工夫や長い英文を読むことの苦手を解消する工夫（グラフィック・オーガナイザーの導入）を試みた。今回は、萩高等学校で行ったアンケートとその結果の数値を授業で工夫を行う前と後を比較しておきたい。

### 1. 英語学習アンケートの構成

高校生への英語学習アンケートは、令和 5 年度山口県英語教育改善プラン推進事業の一つとして萩高等学校探究科 1 年生 40 名に 6 月と 1 月の 2 回行っている。6 月の英語学習アンケートの項目は、ベネッセが行っている英語学習意識調査などを参考に小川が作成した。6 月のアンケート結果を小川と藤本が話し合い、1 月のアンケート質問項目に生徒の英語苦手意識を探る質問項目を加えている。また、この事業が終わった後も、小川と藤本は協力して、授業の補助教材として教科書本文について音変化やイントネーションを意識した音読用のシートや論理構成をつかみやすくするグラフィック・オーガナイザーを作成し、2 年普通科の生徒 20 名をアンケート対象とした英語学習アンケートを 1 月に行った。3 年次に当たる令和 7 年度は、大学の志望別にクラス分けを行っている 3 クラス約 80 名の生徒を対象として 7 月に英語学習アンケートを実施している。また、3 年生に対しても、教科書本文の論理構成を把握しやすくするためのグラフィック・オーガナイザーを作成し、生徒の英文理解の補助とした。まず、令和 5 年度の英語学習アンケートの項目とその結果について、1) 英語授業理解、2) 他教科との比較、3) 英語学習時間、4) 英語活用意識、5) 異文化意識、6) 英語イメージ、7) 4 技能別英語学習、8) 自由記述、9) 1 月に追加した質問項目の順に、小川と藤本のコメントを交

\* 1 山口県立萩高等学校

えつつ分析していく。質問項目を大きく変えた2年次(令和6年1月)の英語学習アンケートと3年次(令和7年7月)のアンケート項目とその意図や結果については、次の機会に譲りたい。

### 1-1 英語授業理解

中学校から高校に進学した時、教科内容が一気に難しくなる教科の一つが英語である。高校1年時に英語が理解できるかどうかによって、英語授業が楽しくなり英語が好きで得意科目になるか、あるいは英語授業についていくことが困難で英語に苦手意識を持ち始め、英語が嫌いになるかが分かれていく。この項目では、1年生の英語授業理解、得意苦手意識について、アンケート結果を見ていきたい。

#### 1. あなたは、学校の英語の授業をどれくらい理解していますか

	ほとんどわかっている	70%くらいわかっている	半分くらいわかっている	30%くらいわかっている	ほとんどわかっていない
6月	29.3	36.6	29.3	4.8	0
1月	16.7	45.2	31.0	0	0

(注：以下、すべての表中の数値は%を意味する)

#### 2. 英語の授業は楽しいですか

	とても楽しい	まあ楽しい	あまり楽しくない	まったく楽しくない
6月	29.3	70.7	0	0
1月	23.8	64.3	11.9	0

#### 3. 英語は好きですか

	とても好き	まあ好き	あまり好きではない	まったく好きではない
6月	26.8	41.5	31.7	0
1月	26.2	42.9	28.6	2.3

#### 4. あなたは、英語が得意ですか、苦手ですか

	とても得意	やや得意	やや苦手	とても苦手
6月	7.5	32.5	42.5	17.5
1月	4.8	35.7	38.1	21.4

6月のアンケート結果から、英語の授業理解と英語への関心(楽しい・好き)に若干のずれがあることがわかる。他教科との比較や英語イメージとも関連するが、英語理解や成績はさておいても、英語が話せることへの期待感の大きさは、ベネッセやGMOのアンケート結果と同じである。この英語が話せたらカッコいいイメージは、英語という教科の特異性の一つであろう。アンケート結果をもう少し細かく見ると、70%以上の授業理解が約66%で2014年のベネッセの結果51.3%よりも高く、全員が授業が楽しいと回答し、英語が好きも約68%で授業理解の数値とほぼ同じであるが、英語があまり好きでないも32%存在する。さらに、英語授業が理解できて、楽しく好きで得意意識もある層は40%と半分以下で、苦手・やや苦手と感じる生徒は60%でベネッセの結果53.8%よりもやや多い。英語を苦手と感じる時期は、中学1年後半から中学2年後半と高校1年前半に多くなることもとも符合する結果である。授業を半分しかわかっていない層(約34%)、英語が好きでない層(約32%)、英語が苦手な層(60%)は重なり合っているため、この層への対策が必要になってくるだろう。

1月のアンケート結果では、授業をほとんどわかっているが29.3%から16.7%に減少し、70%くらいわかっているが約12%増え、授業理解に困難を抱える層(約38%)も若干増えてきている。また、英語授業が楽しくないが約12%登場し、授業理解に困難を抱える層が授業を楽しめなくなっている。英語が好きや得意の割合に変化はないので、二極化はまだ固定化はしていないと考えられる。

以上の共通した分析に加え、小川は、英語の授業は楽しいかという質問に対して6月には0%であった「あまり楽しくない」が1月には1割程度現れるのは、英語を難しいと感じている生徒が増えている結果だと推

測している。生徒が難しいと感じる根拠として、言語活動に重きが置かれていた小中学校の英語とは異なっていて、高校では1年次から言語活動と並行して大学入試に向けた演習や授業を実施していることをあげている。

## 1-2 他教科との比較

他教科との比較であるが、生徒がどの教科と比較しているかは不明なので、ここでは英語への関心の高さと考えておく。他教科と比べて英語は面白いは、6月（75.6%）と1月（61.9%）ともに高いが、あまりあてはまらないが1月には約14%増加している。これは、英語は簡単と感じないと回答する層が53.7%から78.5%と約25%増加したことと関連するのだろう。しかし、英語の授業を増やしてほしいと希望する層が、6月（41.4%）よりも1月（52.4%）が増えている。英語苦手層のうちでも英語授業を増やしてほしいと希望する生徒、言い換えれば、英語理解をあきらめていない生徒が多いことが窺える。

英語が難しい、面白くないという生徒が増加している一方で、英語の授業を増やしてほしいと考えている生徒が増加しているという結果について、小川は、難しい、面白くないからやりたくないといことではなく、難しいからこそもっと勉強して理解できるようになりたいという生徒や、大学受験における英語の重要性を考え嫌いだけどやらなければならないと考えている生徒が一定数はいると考えている。この英語理解への意欲をもつ生徒に対する手立てを工夫していけば、クラス全体の英語力の向上につながる。その工夫を今後も検討していきたい。

### 5. 他の教科と比べて英語は面白い

	とてもあてはまる	まああてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない
6月	19.5	56.1	24.4	0
1月	19.0	42.9	38.1	0

### 6. 他の教科と比べて英語は簡単を感じる

	とてもあてはまる	まああてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない
6月	9.8	36.6	43.9	9.8
1月	2.5	19.0	59.5	19.0

### 7. 英語の授業をもっと増やしてほしい

	とてもあてはまる	まああてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない
6月	7.3	34.1	58.5	0
1月	11.9	40.5	42.9	4.7

## 1-3 英語学習時間

英語に一生懸命取り組んでいるは、6月（97.6%）も1月（97.6%）も非常に高い。他教科の学習時間もある中で、英語学習に割く時間は1時間くらいの割合が6月よりも1月が増えている。教科書本文の難易度、特に語彙の抽象度が高まり一文が長く複雑化するので、学習時間が増えてしまうのだろう。

### 8. 英語の授業に一生懸命取り組んでいる

	とてもあてはまる	まああてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない
6月	56.1	41.5	2.4	0
1月	47.6	50.0	2.4	0

### 10. あなたは平日、学校の授業以外で1日だいたい何時間くらい英語を勉強しますか (学習塾、家庭教師等も勉強する時間に含めてください)

	ほとんど しない	15分 くらい	30分 くらい	1時間 くらい	2時間 くらい	3時間 くらい	4時間 くらい	5時間 くらい	6時間 以上
6月	9.8	12.2	53.7	17.1	2.4	4.8	0	0	0
1月	9.5	9.5	47.6	28.6	4.8	0	0	0	0

#### 1-4 英語活用意識

英語活用意識と括ったが、英語を使って何ができるかといった職業との関連付けを問う質問項目で、ベネッセやGMOもアンケート項目に含めている。漠然と仕事で英語を使う必要があるだろうと考える高校生が58.5%に対して、大人になって自分が英語を使っているイメージを抱ける高校生は46.4%と12%も低くなる。外国人居住者や観光客が多い都市部以外の高校生にとって、特に授業以外で英語を使う場面は極端に少ない。このような条件を鑑みても、英語を使ってみたいが7割前後あるのは高い数値と言えるだろう。だが、日常的に英語を使う場面が少ないため、英語を使った仕事イメージは3割にとどまっている。ベネッセの結果でも、自分が英語を使うイメージを持ってないが46.6%と半分近いので、英語を使って仕事するイメージがないが6月と1月ともに68～69%になるもの無理からぬところだろう。

##### 9. 教室の外で英語を使ってみたい

	とてもあてはまる	まああてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない
6月	31.7	39.0	29.3	0
1月	28.6	39.1	26.2	7.1

##### 27. 英語を使って仕事をしたい

	とてもそう思う	まあそう思う	あまりそう思わない	まったくそう思わない
6月	4.9	26.8	61.0	7.3
1月	7.1	23.8	57.1	11.9

##### 28. これからも英語をがんばって勉強したい

	とてもそう思う	まあそう思う	あまりそう思わない	まったくそう思わない
6月	65.9	34.1	0	0
1月	66.7	31.0	2.3	0

#### 1-5 異文化意識

異文化への関心は、6月（83%）から1月（69%）で14%下がる。ベネッセの結果でも、小学校英語を経験した高校1年生の異文化への関心は67.3%なのでこの数値は低くはない。だが、そもそも異文化が何なのかが生徒にとって曖昧かもしれないし、英語教科書の題材が環境問題や科学技術あるいは人権問題が多く、文化のイメージが抱きにくいことも関連するだろう。それでも、異文化に興味がないが17%から30.9%に大きく増えているのは気にかかる。また、高校生にとってSNSやインターネットを通じての情報入手は日常的なのだろう、スポーツや歌などの文化は6月（75.6%）と1月（80.9%）ともに高い関心を示している。

##### 22. 外国・異文化に興味を持ってない

	とてもあてはまる	まああてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない
6月	2.4	14.6	53.7	29.3
1月	7.1	23.8	35.7	33.3

##### 25. 外国の文化やスポーツに興味がある

	とてもそう思う	まあそう思う	あまりそう思わない	まったくそう思わない
6月	29.3	46.3	22.0	2.4
1月	23.8	57.1	14.3	4.8

#### 1-6 英語イメージ

英語の歌や映画あるいはインターネット動画やゲームは、総じて高い関心を示している。これらの項目は、6月と1月で有意的な変化はなく、ベネッセも同傾向を示している。この項目の社会的意義は認めるが、生徒がどこに英語学習のつまづきを感じているのかを特定するものではないので、英語イメージに関する項目は

英語学習アンケートでは必須とは言えない。また、英語が話せたらカッコいいは、ベネッセのアンケート結果（90.5%）と同じように、6月（87.8%）と1月（92.8%）ともに高い数値になっている。英語活用意識や4技能別英語学習とも関連するが、英語が話せたらカッコいいイメージが英語学習の効率化には直接結びついていないようだ。

11. 英語の歌を聴いたり歌ったりする

	よくある	ときどきある	あまりない	まったくない
6月	39.0	36.6	22.0	2.4
1月	42.9	26.2	19.0	11.9

12. 英語音声の映画やテレビ番組を観る

	よくある	ときどきある	あまりない	まったくない
6月	4.9	19.5	34.1	41.5
1月	9.5	21.4	38.1	31.0

13. インターネット上の英語の動画やwebサイトを見る

	よくある	ときどきある	あまりない	まったくない
6月	9.5	26.8	39.0	24.4
1月	9.5	40.5	23.8	26.2

14. 英語音声のゲームをする

	よくある	ときどきある	あまりない	まったくない
6月	7.3	14.6	31.7	46.3
1月	7.1	19.0	23.8	50.0

24. 英語が話せたらカッコいい

	とてもそう思う	まあそう思う	あまりそう思わない	まったくそう思わない
6月	56.1	31.7	12.2	0
1月	59.5	33.3	7.1	0

### 1-7 4技能別英語学習

英語学習の4技能「読む、書く、聞く、話す」に関する質問項目で、この英語学習アンケートで最も重要な項目である。英語でメールを書くことがないは、6月（85.3%）から1月（95.3%）で10%も増えている。同じように、自分から英語の本を読むことはないも、6月（90.2%）と1月（95.2%）両方とも90%を超えていて、授業以外で英語を使う機会や動機（必然性）がないことが浮き彫りになっている。英語のテストでいい点数を取りたいの100%（1月）が如実に示すように、高校生にとって英語学習は大学入試の準備というのが本音だろう。本来、英語学習アンケートは、高校生が英語学習のどこに困難（つまずき）を感じているのかを特定し、効率的英語学習を提案するために行うものだ。小川と藤本は、ベネッセを下にしたアンケート項目を改善し、1月のアンケートでは音声とリーディングおよび復習に関する項目を追加した。

まず、アンケート結果を分析しておこう。単語学習では、覚えるのが難しいは約76%前後で変化はないが、高校での英語学習に慣れてきたのか、単語学習に大きな困難を抱える層は41.5%から19%に大幅に少なくなった。これに対して、文法に困難を抱える層は、63.4%から73.9%と10%増加している。1月のアンケートで復習で困っていることでも、文法の効果的な復習の仕方、文法問題の使い方などが挙げられている。知識としての文法をどのように使えばよいのか、文法問題を解いているがこれが何に繋がるのかわからない、納得感がないという悩みや困難点が特定できた。文法指導の一つの指針となる結果だ。

次に、小川が授業内で生徒に音声への意識を高めるよう工夫してきた音声指導について、英語を話すのが難しいかについて、あまり難しく感じないが4.9%から23.8%と約6倍増え、授業内で英語を話すことに抵

抗感が少なくなっている。また、英語を聴き取ることがとても難しいも、6月の48.8%から1月の33.3%に15%も減少した。聴き取りに関して、1月のアンケートでは、a. 発音できないから聞き取れない、b. 発音はできるが聞き取れない・話せない、c. 一つ一つの単語はわかるが、文としてつながると、音の同化や脱落があり聞き取れない、d. そもそも知らない単語ばかりである、e. 聞き取るのが難しいとは思わない、を加えた。その結果、59.5%と圧倒的に多かったのが、c. の一つ一つの単語はわかるが、文としてつながると、音の同化や脱落があり聞き取れないであった。この結果を受け、小川と藤本は、2年時の授業の音読指導で、教科書の1~2文を使って、音の連結、同化、脱落を可視化して、生徒が音読しやすくなるシートを作成して、音変化を意識させることとした。

萩高校が使っている英語教科書 *ELEMENT I* (啓林館) は、1レッスンの延べ語数は500語から1000語あり、決して優しい部類の教科書ではない。だが、教科書本文の理解に困難を感じない層は56.1%から71.4%と約15%も増え、難しいと感じる層は1月ではいなくなっている。この項目も1月のアンケートで、a. 一文一文は理解できるが文同士の関係が曖昧で全体が掴めない、b. 長い文で修飾関係がわからないので理解できない、c. そもそも知らない単語ばかりである、d. 理解するのが難しいとは思わない、を加えている。このクラスが探究科ということもあってか、教科書の理解に困難を感じていない層は38.1%いるが、それでも文同士の論理関係の把握や修飾関係の理解に難しさを感じる生徒が、それぞれ23.8%と21.4%と約45%とクラスの半数近くいることがわかる。小川と藤本は相談して、文と文の論理関係、パラグラフ間の関係を、例えば、He argued that …が直後のhis argumentに言い換えられていること理解しながらテキストが理解できるよう図式化したグラフィック・オーガナイザーを作成して、生徒の理解を促進することとした。

最後に、英語の文のつくりや仕組みの面白さだが、これは教員が最も力を入れて指導する文法の説明が生徒にどのように受け止められているかを確かめる項目である。6月の時点では51.2%あった面白いと感じる層が1月には33.3%と約18%も減少する。教員の文法説明を退屈に思っている生徒が7割近くいるということだ。生徒が復習で困っているのが文法活用の仕方であることを考えると、授業内の教員の文法説明は生徒の文法理解や運用に結び付いていないかもしれないと、自戒しなければならないだろう。文法指導は単文中心になりがちで、パラグラフ内やパラグラフ間の論理構造の理解や説得的英文の作成に直結させる工夫を今後検討する必要があるだろう。

文法が難しいと考えている生徒が1月で1割を超えやや微増となったことについて、小川は、仮定法や話法など高校で本格的に学ぶ文法項目も増えてきたからではないかと考えている。また文法をしっかり教える授業形態<文法説明→演習>が、教員・生徒ともに退屈な授業になる要因の一つと考えられる。またセンター試験から共通テストになり純粋な文法問題が消えたことで文法を軽視している生徒がいることも文法を難しく感じさせている一因だろう。話すことが難しいという項目においては、難しいと答えた生徒の割合は減少傾向にある。特に、とてもあてはまるは10%以上も下がっている。1年間を通して帯活動で、ペアでのトークやパフォーマンステストやプレゼンテーションなどのスピーキング活動を多く取り入れたことにより、情意フィルターが下がったからだと考えられる。話すことに慣れてくれば、次のステップとして話す内容や正確さにも踏み込んで指導していくと、より良い英語学習になるにちがいない。

#### 15. メールなどで英文のメッセージを書く

	よくある	ときどきある	あまりない	まったくない
6月	0	14.6	39.0	46.3
1月	0	4.7	16.7	78.6

#### 16. 英語の本を自分から進んで読む

	よくある	ときどきある	あまりない	まったくない
6月	2.4	4.8	39.0	51.2
1月	0	4.8	38.1	57.1

17. 単語を覚えるのが難しい

	とてもあてはまる	まああてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない
6月	41.5	34.1	19.5	4.9
1月	19.0	57.1	23.8	0

18. 文法が難しい

	とてもあてはまる	まああてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない
6月	26.8	36.6	36.6	0
1月	31.0	42.9	26.2	0

19. 英語を話すのが難しい

	とてもあてはまる	まああてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない
6月	46.3	48.8	4.9	0
1月	33.3	42.9	23.8	0

20. 英語を聞き取るのが難しい

	とてもあてはまる	まああてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない
6月	48.8	36.6	12.2	2.4
1月	33.3	52.4	11.9	2.4

20-1 英語を聞き取るのが難しいと感じるのはなぜか

	発音できないから聞き取れない	発音はできるが聞き取れない・話せない	一つ一つの単語はわかるが、文としてつながると、音の同化や脱落があり聞き取れない	そもそも知らない単語ばかりである	聞き取るのが難しいとは思わない
1月	11.9	11.9	59.5	11.9	4.8

21. 教科書の本文を理解するのが難しい

	とてもあてはまる	まああてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない
6月	12.2	31.7	48.8	7.3
1月	0	28.6	61.9	9.5

21-1 教科書の本文を理解するのが難しいと感じるのはなぜか

	一文一文は理解できるが文同士の関係が曖昧で全体が掴めない	長い文で修飾関係がわからないので理解できない	そもそも知らない単語ばかりである	理解するのが難しいとは思わない
1月	23.8	21.4	16.7	38.1

23. 英語の文のつくりやしっくりが面白い

	とてもそう思う	まあそう思う	あまりそう思わない	まったくそう思わない
6月	7.3	43.9	43.9	4.9
1月	9.5	23.8	52.4	14.3

26. 英語のテストでいい点数を取りたい

	とてもそう思う	まあそう思う	あまりそう思わない	まったくそう思わない
6月	78.0	19.5	2.5	0
1月	78.6	21.4	0	0

## 1-8 自由記述

「もし、英語ができればどんなことをしたいですか」に対して、6月と1月とも、英語を使って海外旅行したい、海外の人と話したい・交流したい、映画を字幕無しで見たい、和訳なしで英語の本を読みたい、留学したい、外国の人と英語でゲームをしたいなど、が書かれている。これも、英語を話せたらカッコいいイメージのひとつと言える。1月は、この自由記述に生徒の英語学習の困難点を確認できる項目、「1. 1年間英語を勉強して何か変化はありましたか、2. 英語の復習で何に重点を置いていますか、3. 授業の復習の仕方を知りたいことは何ですか」を追加した。

## 2. 1月に追加した質問項目

先にも触れたように、6月と1月の英語学習アンケートはベネッセなどが行っている英語学習調査を参考にして作成した。だが、英語が好きか嫌い、英語がいつから苦手になったか、あるいは、文法が難しい、英文を書くのが難しい、英語を聞くのが難しい、単語を覚えるのが難しいなどの項目は、ベネッセの言う「英語の指導と学習の課題を明らかにする」、文法学習のどういった点が難しいのか、英語を聞くことの難しさはどこにあるのか、特に英語を読むうえでどういったところが難しいかなど、英語学習の具体的なつまづきに関する項目ではなかった。そこで、1月のアンケートでは、小川と藤本の協議の上で、学習態度に関する項目と自由記述による1年間の英語学習の成果と復習での困りごとの項目をいれることにした。

### 2-1 1月に追加した質問項目

1月に追加した質問とその結果を示す。英語学習の形態（少人数か全員か）では、おおむね少人数活動を好んでいることがわかる。少人数のほうが英語を使う機会が多いからだろう。パソコンやタブレットの利用については、クラスの4分の3（73.8%）が抵抗感を持っていない。また、英語の授業で身につけたい領域では、話すよりも書くほうが若干多いのは意外であった。93%が英語が話せたらカッコいいと思いながら、書くことは大学入試に必要なのでこのような結果になっているのだろう。最後に、英語の技能を高めるはつきりとした目標について、あると無いが50%ずつできれいに分かれた。たとえ大学入試という目標があっても、教室外で英語を使う場面がないため具体的にどこに重点を置けばよいかのかわりにくいだろう。

1. 一人で英語の学習をするのが好きである。

	とてもそう思う	まあそう思う	あまりそう思わない	まったくそう思わない
1月	23.8	45.2	31.0	0

2. ペアで英語の学習をするのが好きである。

	とてもそう思う	まあそう思う	あまりそう思わない	まったくそう思わない
1月	19.0	45.2	33.3	2.5

3. 小さな数人のグループで英語を学習するのが好きである。

	とてもそう思う	まあそう思う	あまりそう思わない	まったくそう思わない
1月	28.6	47.6	21.4	2.4

4. クラス全員で英語の学習をするのが好きである。

	とてもそう思う	まあそう思う	あまりそう思わない	まったくそう思わない
1月	14.3	50.0	31.0	4.7

5. パソコン（タブレット）を使って英語を学習したいと思う。

	とてもそう思う	まあそう思う	あまりそう思わない	まったくそう思わない
1月	26.2	47.6	26.2	0

6. 学校の授業では英語の読む力をつけたい。

	とてもそう思う	まあそう思う	あまりそう思わない	まったくそう思わない
1月	52.4	47.6	0	0

7. 学校の授業では英語の聞く力をつけたい。

	とてもそう思う	まあそう思う	あまりそう思わない	まったくそう思わない
1月	54.8	42.9	2.3	0

8. 学校の授業では英語の書く力をつけたい。

	とてもそう思う	まあそう思う	あまりそう思わない	まったくそう思わない
1月	61.9	35.7	2.4	0

9. 学校の授業では英語の話す力をつけたい。

	とてもそう思う	まあそう思う	あまりそう思わない	まったくそう思わない
1月	54.8	40.5	4.7	0

10. 英語の技能を高めるためのはっきりとした目標がある。

	ある	ない	どちらでもない
1月	50.0	45.2	4.8

## 2-2 1月に追加した自由記述

1月は、1. 1年間英語を勉強して何か変化はありましたか、2. 英語の復習で何に重点を置いていますか、3. 授業の復習の仕方を知りたいことは何ですか、を追加した。まず、1の変化については、半数近くの生徒が単語量が増えたことをあげると同時に、この語彙の増加が長文への抵抗感を和らげ、長文理解につながったと回答している。また、語彙力が上がることによって、文法がより理解できるようにもなっているようだ。少数だが、リスニングや発音に自信が付いたというものもある。授業内での音読指導が少しずつ実ったということだ。授業への否定的な意見はないが、中学で得意だった英語が高校になって難しくなったとのため息のような意見があり、このギャップを埋めていく工夫が英語嫌いをなくすことにつながるだろう。

2の復習の重点では、圧倒的に文法と単語が多く、次に教科書の内容や表現の確認が続き、残念ながら教科書を音読するは少なかった。3の復習の仕方を知りたいことは、文法の復習の重点、単語の覚え方、長文の読み方、なにより何を復習すればよいのか、復習でいちばん大切なことはなにかなど、生徒が本当に困っていることがあげられている。生徒は必要以上に文法に時間を割きながら、それが自分の英語力の向上にどう役立っているのか感触が掴めていないのであろう。テストでも学習量に比例した成績が残せていない可能性もある。文法を知識としてではなく、読むや書くといった言語の使用場面と連動させる指導の工夫が必要だろう。とは言え、言語の使用場面と結びつきやすい文法項目とそうでない文法項目があり、学習指導要領が謳っているほどは簡単ではない。

また、長文の読み方や情報の整理の仕方については、グラフィック・オーガナイザーを使って英文の情報の組み立てや流れを可視化して、生徒の英文理解の補助となるよう対応している（2年次や3年次のアンケート結果から英文理解への役立ち感は確認できている）。だが、復習で何をすればよいのかわからないという生徒の困難点は、残念ながら英語学習を超えた学習動機や学習習慣の問題と思われる。

1年間の勉強の成果として単語力や長文の読解力をあげる生徒が多かったことについて、小川は、ほぼ毎週の単語テストにより点数として目に見える結果がでるから単語力や長文読解の向上は生徒自身にもわかりやすいからだろうと分析する。しかし、スピーキングやリスニングは、生徒は向上したと実感できていないようだ。教員からすれば、生徒は音読やリスニングを1年間しっかりと実践し、4月から比べて確かに多くの生徒の力があがっていると実感できるのだが、生徒からすると客観的な点数等で可視化しにくいために、自分の力が向上している実感が持ちにくいのだろう。復習の重点に関しても、基本的に家庭で復習するときにはスピーキングをすることは難しい。もちろん大学入試にスピーキングが課されないということも大きな要

因であり、多くの生徒が入試に向けて英語学習をおこなっている以上、単語・文法・読解といった大学入試の大部分を占める範囲を重点的に復習していることは当然のことと考えざるを得ない。

## おわりに

今回の追加したアンケート項目から、発音できないから聞き取れない、発音できるが聞き取れない、音は分かるが文として繋がり音変化すると聞き取れない、といった音変化への対応ができていないために聞き取れないことを明らかにできた。また、読解では、文と文の関係、長い修飾関係の理解に困難があることがわかった。さらに明らかになったのは、教室内では英語理解や英語使用はよくできて、教室外になると英語を使うことがなかったり、英語と仕事が結びつかないなど、英語が本来のコミュニケーション活動と結びついていないという根本的な課題が再確認された。英語を使う機会がないために、自分たちは英語が話せないと思い、その裏返しとして、英語が話せるとかっこいいと思うようになっていったのだろう。これは教室内での英語指導の範囲を超えた問題でもある。さらに、文法の学習が自分の英語理解や運用に跳ね返っていないという悩みがあることもわかった。今回の2回の英語学習アンケートは、生徒が英語学習のどこに困難(つまずき)を感じているのかを明らかにできた。次回は、生徒の英語学習の困難を解消する工夫の試みとその結果について検討していく。(学習アンケート項目の作成と集計は小川が担当した。アンケート結果の分析は藤本が行い、その分析に対して小川がコメントを付すという形で、執筆を分担した)

## 参考文献

GMO リサーチ (2017) 英語に関する意識調査

(<https://www.gmo.jp/news/article/5792/> 最終閲覧日: 2025年9月25日)

中田達也、鈴木祐一、濱田陽 (2022) 英語学習の科学 研究社

中田達也 (2023) 最新の第二言語習得研究に基づく究極の英語学習法 KADOKAWA

ベネッセ教育総合研究所 (2014) 速報版 中高生の英語学習に関する実態調査 2014

(Teenagers\_English\_learning\_Survey-2014\_ALL.pdf 最終閲覧日: 2025年9月25日)

ベネッセ教育総合研究所 (2015) 子どもたちの未来を豊かにする英語教育とは?—「中高生の英語学習に関する実態調査 2014」から考える課題と指導実践のあり方—

(<https://www.arcle.jp/report/2014/0002.html> 最終閲覧日: 2025年9月25日)

ベネッセ教育総合研究所 (2021) 英語を使いたい、学びたいという意欲を高める英語教育とは—一小6時から高3時まで7年間追った「英語学習に関する継続調査」をもとに考える—

(<https://www.arcle.jp/report/2021/pdf/ARCLESYMP02021.pdf> 最終閲覧日: 2025年9月25日)

ベネッセ教育総合研究所 (2022) ダイジェスト版 高3生の英語学習に関する調査<2015-202 継続調査>

([https://benesse.jp/berd/up\\_images/research/kousaneigo2021.pdf](https://benesse.jp/berd/up_images/research/kousaneigo2021.pdf) 最終閲覧日: 2025年9月25日)

ベネッセ i-キャリア (2024) 「大学生の英語学習意識について」に関する調査

([https://www.benesse-i-career.co.jp/news/20240404\\_1release.pdf](https://www.benesse-i-career.co.jp/news/20240404_1release.pdf) 最終閲覧日: 2025年9月25日)